

Kontyû, 36 (2) : 203-205. 1968

加藤正世先生を憶う

石倉秀次

Memory of Dr. Masayo Kato

By Hidetsugu Ishikura



日本昆虫学会々員、元昆虫趣味の会々長加藤正世先生は、昨年11月7日足跡の多かつた70才の御生涯を閉じられた。昭和初期から太平洋戦争の末期までの困難の多かつた時代に、わが国のアマチュア昆虫学界の発展の推進力を果された先生の御逝去は、まことに哀悼の至りにたえない。

別掲の先生の御略歴が示すように、先生ははじめ自ら飛ぶことにあこがれて飛行術を修得されたが、やがて飛ぶ昆虫に心をひかれ、当時昆虫学者のメッカであつた台湾の農業試験所に職を奉ぜられた。当時のことを私は詳かにしない。私が先生のお名前を知つたのは、昭和6年、すなわち満州事変勃発の年に、先生がその前年に出版された「趣味の昆虫採集」を手にしたときであつた。翌7年、先生が昆虫趣味の会を創立さ

れたのを知つて、入会した。当時私は府立高等学校（現在都立大学）尋常科の生徒で、学校は目黒区衾町にあり、先生は世田谷区野沢1丁目に居住されており、それほど距離でなかつたので、土曜日などよくお宅にお邪魔した。広いお住居ではなく、玄関口から標本箱が積み上げてあり、大抵何人かの学生昆虫家がつめかけていた。この頃先生の活動はめざましく、7年には「蟬の研究」を、8年には「昆虫標本整理法」、7年から8年にかけては分類原色日本昆虫図鑑12巻を刊行されたほか、昆虫趣味の会の機関誌「昆虫界」を創刊された。当時昆虫学の定期刊行物は本学会の機関誌「昆虫」のほか数種あつたが、いずれも職業昆虫学者か大人の昆虫愛好家のものであつたので、昆虫界の創刊は学生昆虫家を中心に大きな反響をもたらした。雑誌そのものも原色刷の表紙に華麗な昆虫を紹介した原色刷の口絵を入れたスマートなもので、はじめは書店の店頭売りというも斬新な試みであつた。先生には一面頑固な性格があつただけに、この印刷には発行所との間に表紙を刷り替えるなど、いろいろなやりとりがあつた。また後に書店売りをやめ、昆虫趣味の会で発送するようになってからは、会の会計や雑誌の発送は秀子夫人の役割となるなど、昆虫趣味の会の運営は文字通り御夫妻の仕事となつた。

昆虫界は全国に散在した学生昆虫家の研究を連絡する広場となつた。昨年10月私は本学

会創立 50 周年記念祝典に出席し、その際先生の御病勢が思わしくないことを告げられたが、この日私が祝典に出席したのは、昆虫界を通じて知り会った旧友白畑孝太郎氏が多年の昆虫学界に対する氏の御功績によつて本学会から表彰されたのをお祝い申し上げ、またNHKのテレビ番組「ある人生」に主人公として出られる同氏の対談の相手をつとめるためであった。白畑氏のほかにも私は昆虫界を通じて多くの虫友達を得た。白水 隆氏もその一人である。

昆虫界はやがて月刊となり、昆虫の専門学術誌に登載しても恥かしくないほど充実した投稿も多くなつた。このことは職業昆虫学者や専門学術誌の編集者にとつては快からぬことであつたらしい。先生の活動や研究に対する眼は必ずしも暖かくなかつた。

昭和 10 年、先生の御一家は世田谷野沢から練馬石神井の三宝寺池畔に新築されたお宅に移られた。当時私はトンボの採集に熱中しており、しばしば三宝寺池にも採集を試みて、その都度お宅にお邪魔した。当時三宝寺池畔を含めて石神井一帯はまだ武蔵野の野趣を残しており、昆虫採集には恰好な場所であつた。この年の夏には先生からマルタンヤンマが採れるから採集に来ないかとの御葉書をいただいた。その頃このヤンマは東京ばかりでなく、各地でもいわゆる珍品で、トンボの採集家の垂涎措く能わざるものであつた。

昭和 11 年私は大学に入学すると応用動物学を志し、卒業後数年は在京したものの、次いで地方勤務となり、先生との接触は少なくなつた。それでも昆虫界が発行されていた間は何かと連絡があつたが、それも昭和 19 年同誌が第 11 巻 117・118 号で戦時終刊してからは途絶えた。戦後は何かと取紛れて先生には御無沙汰ばかり申し上げていた。

昭和 5 年、先生が趣味の昆虫採集を著述されたのは 33 才のときで、以後十数年アマチュア昆虫家を指導された先生の足跡はまことに大きい。先生の情熱に育まれて後に職業昆虫学者となつた人も少なくない。

昨年先生は 6 月頃から健康が勝れなかつたが、強い意志というか頑固と申し上げるか、我慢されるうちに病勢が進み、入院されたとき癌は手の施しようのないほど悪化していたと秀子夫人は語られた。また三宝寺池畔の住宅地化から脱出するために、茨城県下にすでに土地を求められ、新たに研究の展開を計画されていたのに、この先生に天は時を与えなかつた。まことに無情である。謹んで先生の御指導を感謝し、御霊の御冥福を祈り上げる。

加藤正世博士 (1898—1967) 略歴

明治 31 年 4 月 19 日 栃木県高根沢に生る

明治 45 年 東京四谷三光小学校卒業

大正 5 年 攻玉社中学校卒業

同 年 帝国飛行協会に就職「帝国飛行」の編集に従事

同 8 年 伊藤飛行機研究所入所

同 10 年 同所操縦科卒、三等飛行士の免許を受く

同 12 年 渡台後台湾総督府中央研究所嘉義農事試験支所入所

同 13 年 台湾総督府中央研究所農業部応用動物学科勤務

昭和 3 年 同上退所京都に帰る

- 同 6 年 東京文理科大学動物学教室研究生となる
 同 7 年 昆虫趣味の会創立
 同 8 年 機関誌「昆虫界」創刊
 同 10 年 東京石神井公園に加藤昆虫研究所を設立
 同 13 年 同地に蟬類博物館を設立一般公開す
 同 14 年 東京巣鴨中学校教諭
 同 16 年 東京都公園課嘱託
 同 24 年 巣鴨高等学校教諭
 同 25 年 富士見高等学校同中学校教諭
 同 33 年 北海道大学より理学博士の学位を受く，日本生物教育学会理事
 同 36 年 藍綬褒賞授与さる
 同 42 年 11月 7 日逝去，東京富士見霊園に葬り，京都府八幡町飛行神社に合祀さる。
 享年 69 才。

昆虫総目次（第 1 巻—第 35 巻）の内容紹介

既報のとおり，日本昆虫学会は創立 50 周年記念事業の一環として機関誌「昆虫」の総目次を発行することになり，私がおの編纂を命じられた。着手して 1 年有余，漸くその完成をみるこゝとなつたので，ここに内容の簡単な紹介をしておきたい。

内容は大別して「著者索引」と「項目索引」にわけられ，二者相互参照する。

「著者索引」はすべての報文，紹介記事（原則として会報関係のものは除く）を著者の ABC 順に配列したもので，2,277 項に及ぶ。本索引は特定の著者の著述を索引するのに便利である。もとより共著者の場合も ABC 順に記録してあるから，「昆虫」に寄稿された全著者名の索引も容易である。頁数 137。

「項目索引」はその編集に最も苦心した。項目の大綱は *Zoological Record* に準じたが，細分に当つては斯学の最近の進歩やわが昆虫界の事情なども勘案して決定した。大別すれば，昆虫学一般（昆虫学史等 15 項目），分類学（化石昆虫等 27 項目），昆虫地理（分布等 4 項目），形態学（解剖等 20 項目），發育（胚子発生等 16 項目），生理学及び生化学（寿命等 17 項目），生態学（生活史等 32 項目），遺伝及び進化（染色体等 7 項目），応用昆虫学（害虫及び防除等 8 項目）及び会報（大会記録等 4 項目）となる。頁数 101。

このように，総目次の内容が極めて豊富なことは，わが先輩や知友が如何に昆虫学の発展に寄与されたか，はたまた機関誌「昆虫」が果し，また果しつつある貢献が如何に大きなものであるかを物語っている。これらの業績が一冊にまとめられて手軽に索引できるようになつたことは同慶にたえないが，この際，座右に一冊を具え，積極的に総目次を利用されるようおすすめしたい。

購入方法等については本号の会報欄をみられたい。

（平嶋義宏）